

市内遺跡発掘調査報告書

(平成29年度)

-長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書-

例　　言

1. 本書は長野県諏訪市の市内遺跡についての平成 29 年度発掘調査報告書である。
2. 調査主体者は諏訪市教育委員会であり、各作業及び本書編集は諏訪市教育委員会事務局が担当した。
3. 現地調査期間は遺跡ごとに記載した。整理作業は平成 29 年 12 月から平成 30 年 3 月まで、諏訪市埋蔵文化財整理室で行った。
4. 発掘作業と整理作業の分担は下記の通りである。
発掘・構築等実測…児玉利一・増澤道夫・古畠しづゑ　　遺物水洗・注記…増澤・古畠
遺物実測・トレース・採拓・写真撮影・本書執筆作成…児玉
5. 各遺跡の調査記録は諏訪市教育委員会で保管している。略称・出土遺物の注記は下記の通りである。
温泉寺横遺跡…O S J Y 2　　御屋敷遺跡…O Y 3　　千鹿頭社遺跡…S T K A 1 3
境日向遺跡…S K H 6
6. 温泉寺横遺跡出土黒耀石について、蛍光 X 線分析による産地推定を池谷信之氏（明治大学黒耀石研究センター）に業務委託し、実施した。また、同遺跡出土石器 20 点の実測（報告書掲載図作成）を株式会社アルカに業務委託し、実施した。
7. 発掘調査および報告書作成に際し、下記の方々をはじめ多くの方々にご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。
池谷信之 小林健治 高見俊樹 中島透 三上徹也 宮坂清 百瀬一郎 守矢昌文
臨江山温泉寺　温泉寺檀徒会（敬称略）

凡　　例

1. 本文中における水系レベルは可能な限り絶対標高を使用した。
2. 本文中第 1 図は国土地理院 平成 15 年 12 月 1 日発行 1/50,000『諏訪』と、平成 11 年 1 月 1 日発行 1/50,000『高速』を使用し、加筆した。それ以外は諏訪市役所発行の都市計画基本図を使用した。
3. 遺物番号は実測図版と写真図版で一致する。ただし、写真掲載のみの遺物がある。
4. 写真図版のうち遺物については、土器と石斧の縮尺を約 1/2 に、旧石器石器については縮尺を約 2/3 に統一した。
5. 遺物観察表の法量欄で、() は推定復元値である。
6. 執筆者間での用語の統一は行っていない。

目 次

例言・凡例

目次

I 市内遺跡発掘調査について	1
II 温泉寺横遺跡（第2次）	3
III 温泉寺横遺跡出土石器の黒曜石原産地推定	13
IV 御屋敷遺跡（第3次）	23
V 千鹿頭社遺跡（第13次）	29
VI 境日向遺跡（第6次）	32
写真図版	35
報告書抄録	49

奥付



I 市内遺跡発掘調査について

1 今年度の発掘調査

諏訪市内には現在 240 箇所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。これらの包蔵地内における開発行為は例年発生しているが、以前に多かった規模の大きな開発事例は年々少くなり、近年では個人住宅建設などの小規模なものが主体となっている。諏訪市教育委員会ではこれらの開発行為に迅速に対応するため、国庫補助事業として「市内遺跡発掘調査等事業」を実施し、埋蔵文化財の保護を図っているところである。

本年度の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為に伴う発掘届および通知の提出は 18 件あった。件数は昨年と同程度の数である。また、土地開発や売買に関連した事前の有無確認調査の要望もあった。これらのうち、3 件について試掘・確認調査を実施し、本書でその内容について報告したい（第 1 図）。

温泉寺横遺跡の第 2 次調査については、平成 28 年度市内遺跡発掘調査等事業で実施したが、試掘・確認のための現地調査が平成 29 年 2 月 27 日から 3 月 6 日にかけて実施のため、『市内遺跡発掘調査報告書（平成 28 年度）』に収録できなかった。よって本書に収録し報告する。また、同遺跡の第 1 次調査（平成 28 年 9 月に実施）の報告は『市内遺跡発掘調査報告書（平成 28 年度）』に収録したが、第 2 次調査と関連する事柄が多いことから概要に留めた。よって、第 1 次調査についても出土遺物を中心に本書にも収録する。

・補助事業決定の経過（抄）

平成 29 年 2 月 9 日付け 28 生学文第 70 号

平成 29 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書

平成 29 年 4 月 3 日付け 28 庁財第 624 号（長野県教育委員会指令 29 教文第 1-31 号）

平成 29 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書

2 調査組織

調査組織名 諏訪市教育委員会

調査主体者 小島 雅則（教育長）

事務局 土田 雅春（教育次長）

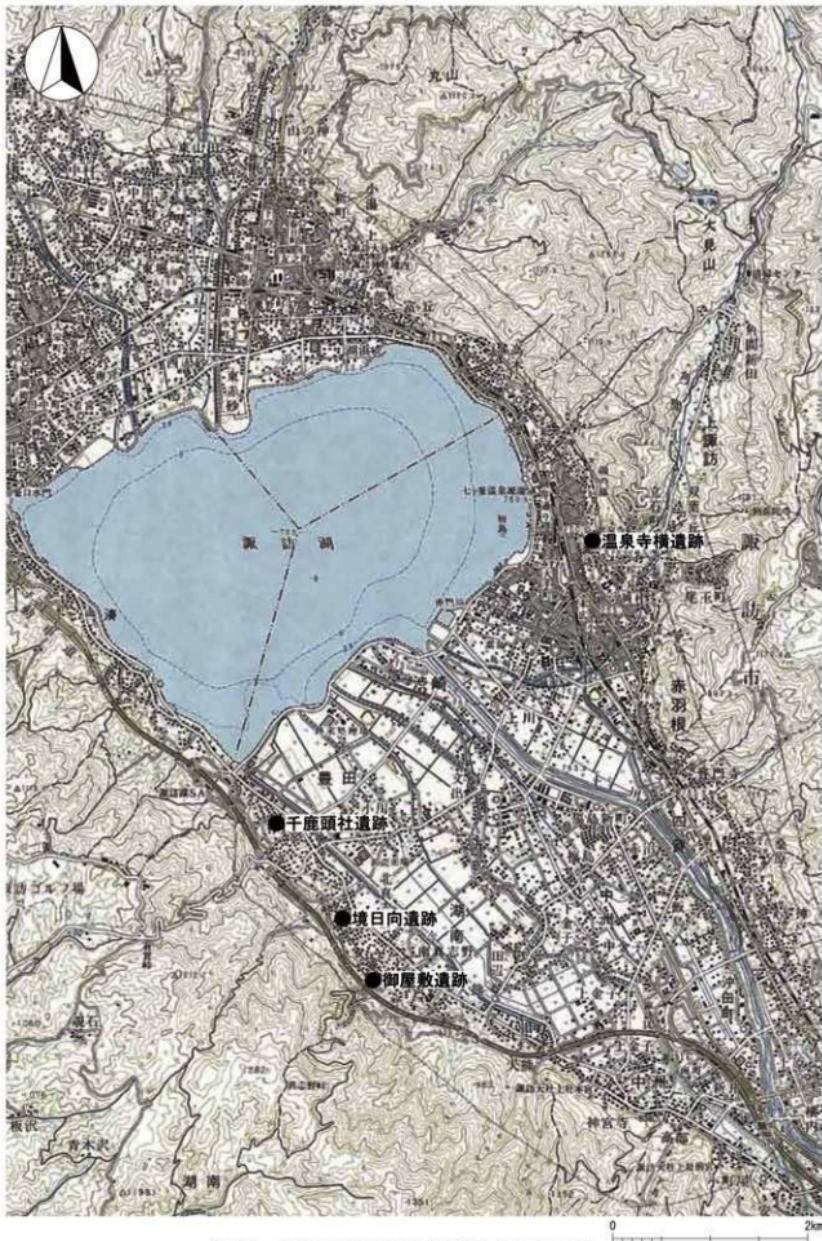
後藤 慎二（生涯学習課 課長）

関沢 佳久（生涯学習課文化財係 係長）

中川 聰史（生涯学習課文化財係 主査）

児玉 利一（生涯学習課文化財係 主任 調査担当者）

調査参加者 古畑 しづゑ・増澤 道夫



第1図 平成29年度調査遺跡位置図 (S=1/50,000)

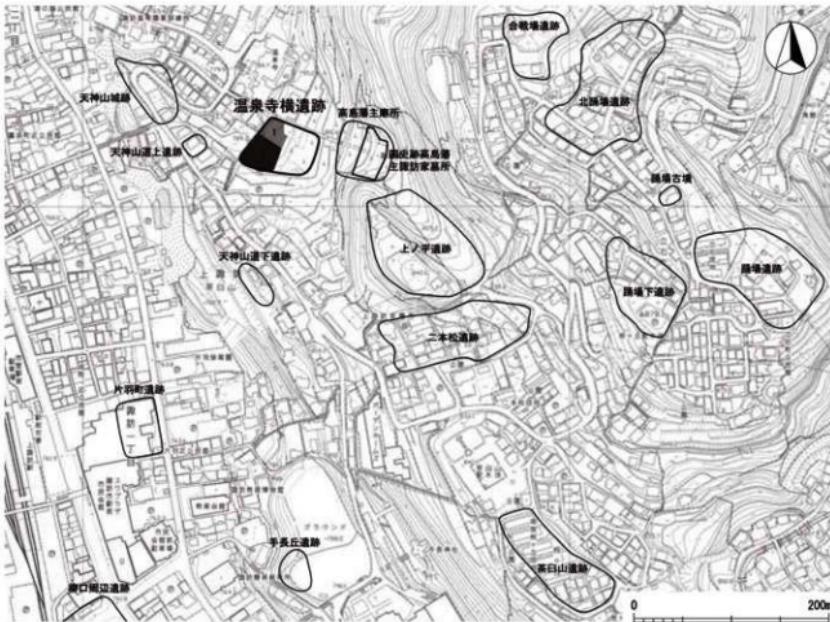
II 温泉寺横遺跡（第2次）

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市上諏訪並松 10690-1 | 4. 調査目的 駐車場建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 29年 2月 27日～3月 6日 | 5. 検出遺構 石器集中出土地点（旧石器） |
| 3. 調査面積 48 m ² | 6. 出土遺物 石器（旧石器・縄文） |

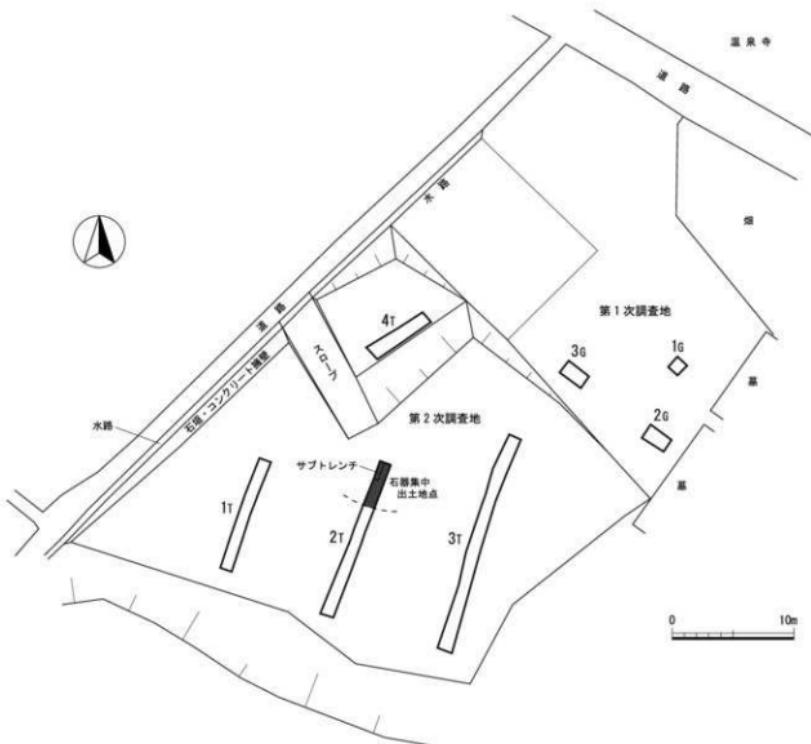
7. 遺跡概要及び調査概要

温泉寺横遺跡は諏訪湖東岸の霧ヶ峰西麓末端にあたる解析谷内に所在する（第2図）。北西方向に開口する谷で、西側は天神山城跡の所在する鋭く突き出した丘陵尾根、東は立石町・茶臼山地区の所在する丘陵に挟まれる。遺跡の北側は江戸時代に高島藩二代藩主の諏訪忠恒によって創建された温泉寺の境内が広がる。谷を東に登ると近世大名家墓所の国史跡「高島藩主諏訪家墓所」が所在する（諏訪市教育委員会 2013）。墓所の上方へさらに登ると上ノ平遺跡に至る（杉原壮介 1973、諏訪市教育委員会 1996）。

遺跡は温泉寺から墓所へつづく登り坂の参道沿い右側（南側）である。旧石器時代の尖頭器や剥片が採集されていたことから埋蔵文化財包蔵地となっていたが発掘調査されたことはなく、現況は墓地と小さな畝が混在している。今回、温泉寺の来訪者駐車場整備の計画を把握し、工事に先立って分布確認のため試掘調査を行うことにした。工事計画の進捗状況によって、予定地北側を平成28年9月に（第1次）、南側を平成29年2月末から3月（第2次）の2回に分けて行った（第3図）。第1次調査地は



第2図 温泉寺横遺跡位置図 (S=1/5,000)



第3図 調査地全体図 (S=1/400)

以前は畠であったが近年は更地。第2次調査地は水田であったが、昭和44年に木造平屋建て住宅5棟が建設されていた。この住宅については第1次調査前の平成28年8月に解体されて更地となった。第1次調査については「市内遺跡発掘調査報告書(平成28年度)」に報告されたが(諏訪市教育委員会2017)、同書編集期間中に第2次調査を実施中で、両者は同遺跡内の関連する調査であることから本書でも取り扱う。

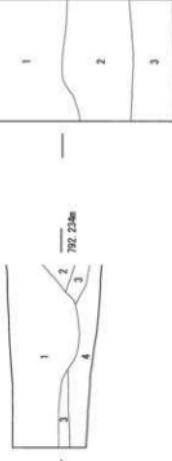
第2次調査は駐車場計画地範囲の南側で、宅地造成された平坦面が2段ある。上段には谷の傾斜方向に合わせたトレンチを3本、下段には傾斜に対し斜め方向のトレンチ1本を設定し、重機および人力で掘り下げを行った(第3図)。宅地造成および住宅解体後であったことから、削平・かく乱により旧表土以下の自然堆積土の残存は少ないと想定していたが、谷側(北側)は黒色土以下が比較的良好に残されていた(第4図)。1~3トレンチの南端はローム土上層は削平されてやや砂質でもろい岩状に固くしまった堆積土(ハードローム)まで達していた。このため、遺構等が包含層される可能性がある堆積は削平されていると判断した。

1トレンチは、南端はハードローム土、北端は2m以上の黒色土堆積があり、短い距離の中で急激に堆積が変化する。遺物出土はわずかで北側は大きなかく乱もあって遺構等の分布は確認されなかった。

2 レンチ西壁



1 レンチ北側面 西壁



1 レンチ北側面 北壁



1 レンチ南側面 北壁 各断面所



3 レンチ北側面 西壁



3 レンチ南側面 西壁



4 レンチ北東壁



4 レンチ北東壁



第4図 調査トレーン断面図 (S=1/40, 2トレーンは1/60)

2トレンチでは遺構(遺物)の分布を確認した。長さ13.5mのトレンチのうち、北側の約4mの範囲で、黒色土下位とローム土漸移土、ローム土上位に剥片・破片が出土し、尖頭器未成品も含まれたことから、石器集中出土地点と判断した。北方向への緩やかな傾斜に合わせて遺物の垂直分布も推移する。幅1mの狭いトレンチであり、石器集中出土の範囲は定まっていないが、少なくとも造成土下に遺構・遺物包含層が残されていることが判明した。北端ではサブトレンチを設けて垂直分布の下端を確認した。分布はローム土の上位のごく浅い範囲に限定でき、いわゆるソフトローム中に収まるようである。サブトレンチ壁面で第6図7の細長い特異な器形の石器が出土している。

3トレンチでは黒色土中からは尖頭器片が複数出土したが、漸移土からローム土上面では2トレンチのような出土量はなく、遺構と呼べるまでではなかった。比較的大きな石がローム土に含まれ、他のトレンチとは異なる様相を確認した。

4トレンチは調査地北側の下段平坦地で、黒色土が85~100cm堆積し、ローム土に変化した。この変化は急激で漸移的ではなかった。検出されたローム土は礫を多量に含んでおり、ソフトローム土ではなく2トレンチ9層や3トレンチ5層と同じ堆積とみられた。このことから、4トレンチ周辺は造成等でローム土上位堆積が削られていると推測した。

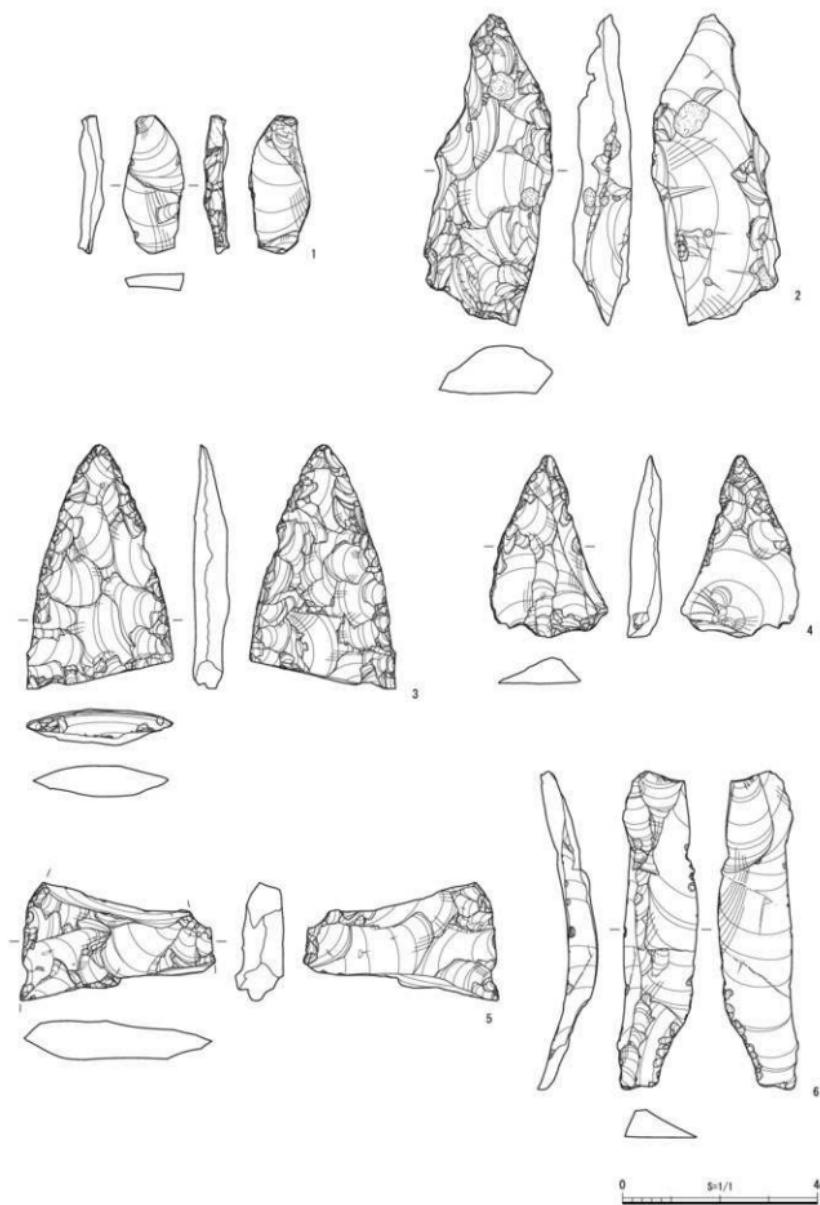
出土遺物について、出土および表採された黒耀石は568点、1,109.5gあった。各トレンチから出土し、尖頭器等が含まれることから旧石器時代の遺跡であることが確認された。ただし、出土は散漫で、また、住宅解体・整地された後の表土で多くの遺物が採集されている。1トレンチからは2点、2・3トレンチが最も多く、4トレンチは黒色土堆積が厚かったが遺物はわずかであった。表採資料ではあるが細石刃1点と、縄文時代に属するとみられる打製石斧が1点ある。ただし、縄文土器は出土していないので総体としては尖頭器製作など旧石器時代に属する遺物と考えられる。

定形石器とその未成品などを出土場所ごとに掲載する(第5図~第8図)。尖頭器は略完形品から製作途中のもの、粗く仕上げられたものがあり、形状もばらつきがある。3は精緻なつくりで黒耀石の透明度と相まって非常にきれいな尖頭器である。特別丁寧に仕上げたような印象をもつ。13は漆黒黒耀石(和田土屋橋北)を用い、形状も他と異なり平行四辺形のように左右の膨らみがずれ、厚みが他に比べて薄い。左右非対称形の尖頭器である。尖頭器は表採資料が多い点で不正確ではあるが、黒耀石自体の特徴が異なること(産出地・採集地の違い)と、尖頭器の形状・作風が異なることとは相関関係にある可能性がある。これは製作者の違いがあることは時期差に起因しているのかは不明だが、黒耀石の種類によって変化がある点は把握された。

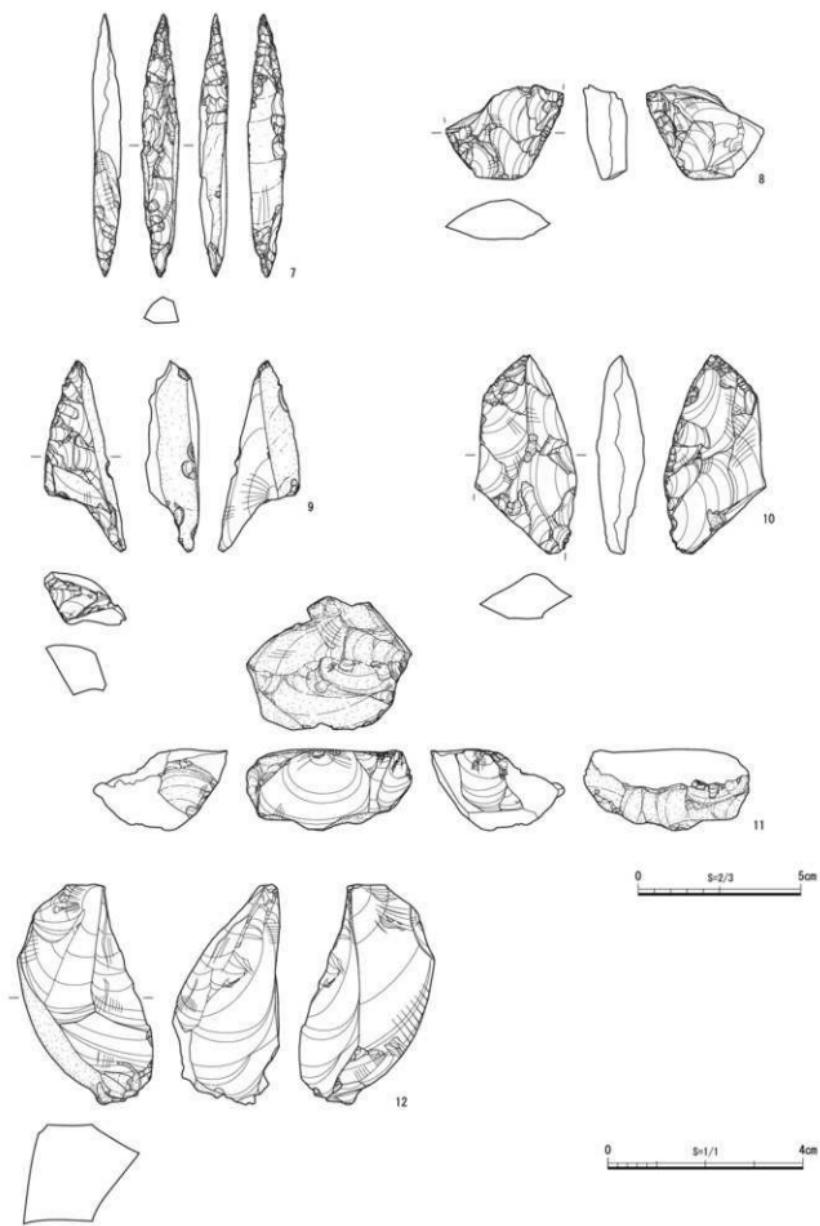
7は2トレンチ北端の西壁面で出土した石器である。一見すると縄文時代の石錐だが、両端を鋭く尖らせ、尖頭器の異形品のようなものの可能性もあるうか。調査では打製石斧が表採されたが縄文土器は出土していないことから(カワラケ・内耳土器片が数点出土している)、縄文時代とするのには消極的原因になる。出土が黒色土からローム土に漸移する所であることも判断に迷う要因である。

石核は2点(11・12)ある。どちらも黒味の濃い漆黒黒耀石で、分析では和田鷹山産である。尖頭器製作に使用するための剥離の仕方ではなく、細石器との関連を思わせる。細石刃が1点、調査地で表採された漆黒黒耀石で和田芙蓉ライト産。肉眼観察レベルでは前述の石核と細石刃は、不純物を含まないきれいな漆黒黒耀石で類似して見える。この他、剥片類や搔器(18)も表採されている。

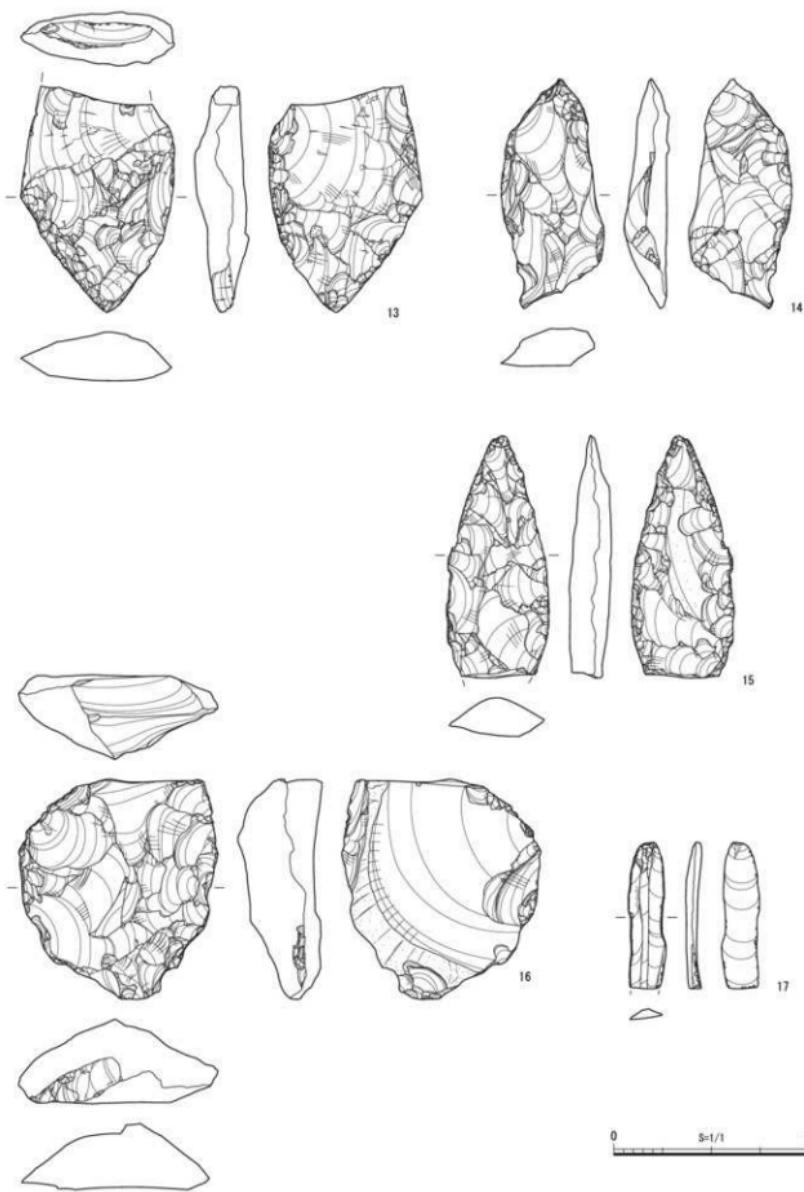
今次調査および第1次調査で出土・採集された黒耀石については、分析可能なものの全点を池谷信之氏に依頼して蛍光X線分析法による原産地推定分析を行った。詳細は後述の報告によるが、本遺跡から最



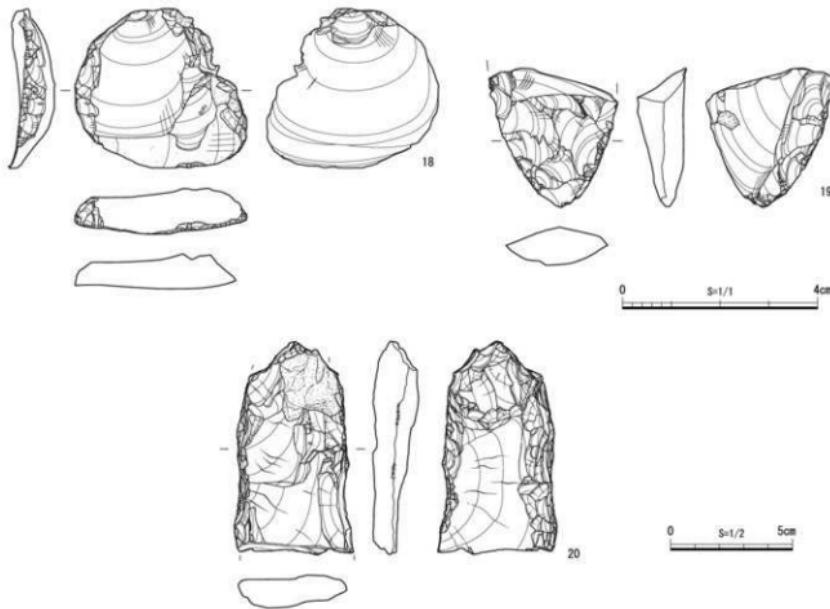
第5図 溫泉寺横遺跡出土石器（その1、S=1/1）



第6図 温泉寺横遺跡出土石器（その2、S=1/1、11のみ2/3）



第7図 温泉寺横遺跡出土石器（その3、S=1/1）



第8図 温泉寺横遺跡出土石器（その4、18・19：S=1/1、20：S=1/2）

第1表 温泉寺横遺跡出土石器観察表

番号	時代	器種	出土位置	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	黒耀石产地推定
5図1	旧石器	打面再生剥片か	1次時 更地(2次調査地)表探	28.4	12.6	5.2	1.5	不可
5図2	旧石器	尖頭器未成品	1次時 更地(2次調査地)表探	63.9	26.5	12.1	15.5	諏訪星ヶ台
5図3	旧石器	尖頭器	1次時 更地(2次調査地)表探	50.1	30	7.6	8.8	諏訪星ヶ台
5図4	旧石器	尖頭器未成品	1次時 更地(2次調査地)表探	37.4	24.2	7	4.5	諏訪星ヶ台
5図5	旧石器	尖頭器	1次時 更地(2次調査地)表探	24.3	40.1	9.9	7.7	和田麗山
5図6	旧石器	根長剥片	1次時 更地(2次調査地)表探	65.3	16.6	12.3	4.8	諏訪星ヶ台
6図7	旧石器か	離状尖頭器か	2トレ北側No.1	54	7.9	6	2.3	諏訪星ヶ台
6図8	旧石器	尖頭器未成品	2トレ北側サブトレ6層	19.5	24.2	9	3.3	諏訪星ヶ台
6図9	旧石器	尖頭器未成品	2トレ北側4・5層	39.3	16.8	11	4	諏訪星ヶ台
6図10	旧石器	尖頭器未成品	2トレ北側4・5層	40.8	21	9.9	6.1	諏訪星ヶ台
6図11	旧石器	石核	2トレ半間5層	25	50.9	41.1	43	和田麗山
6図12	旧石器	石核または剥片	2トレ南側5層	45.3	27.8	22.1	21.2	和田麗山
7図13	旧石器	尖頭器	3トレ北側2層	46.4	31.6	11.2	13.8	和田上屋塚北
7図14	旧石器	尖頭器未成品	4トレ7・8層上面	47.1	21.2	9.4	7.2	諏訪星ヶ台
7図15	旧石器	尖頭器	2次調査地表探	49.8	21.2	8.8	8.6	諏訪星ヶ台
7図16	旧石器	尖頭器未成品	2次調査地表探	45.3	40.9	17.3	28	諏訪星ヶ台
7図17	旧石器	離石刃	2次調査地表探	30.1	7.8	3.3	0.7	和田ヨーライト
8図18	旧石器	種器	2次調査地表探	32.8	35.4	9.5	8	諏訪星ヶ台
8図19	旧石器	尖頭器	2次調査地表探	28.6	26.5	10.1	5.5	諏訪星ヶ台
8図20	縄文か	打製石斧	1次時 更地(2次調査地)表探	87.5	49.1	18.8	81.5	-

も近い原産地である諏訪星ヶ台群とされるものが95%以上で大半を占めるなか、和田鷹山や和田土屋橋に推定されるものもあり、しかも製作過程にあたる遺物であることから、本遺跡では近在の原産地以外の石材も石器製作に使用していることが判明した。

第1次調査の範囲では明らかな遺構はなく、黒耀石剥片の出土も黒色土まで、石器製作に伴うような集中的出土ではないことから流れ込み程度と判断した。第1次調査地は谷の下位にあたり堆積土が厚く造成などの影響は少ないと想像される。一方、第2次調査地は丘陵裾を切土して平坦面を造成しており遺構等は残されていないと予想されたが、自然堆積土が比較的残されており、かつ、量的には少ないが石器集中出土地点も確認されるなど、様々な状況が確認された。駐車場工事については、最終的な造成計画が決まっておらず、造成の範囲・規模によっては現地保存が叶うか、破壊される場合には記録保存調査等も必要になるため、引き続き保護協議を行っていくことになった。

8. 総括

温泉寺横遺跡では旧石器時代の尖頭器製作跡とみられる石器集中出土地点が確認された。遺物分布の中心は2トレンチの北側で、黒色土の下位からローム土漸移土・ローム土上位の範囲である。調査地全体でも遺物が表面採集されるが、土地の造成によって移動しているようであり、遺構として残されている様子はみられなかった。丘陵崖下または谷の中という遺跡立地は、近接する上ノ平遺跡第4次調査の谷底に遺構分布が確認されたことに共通する様相である。温泉寺周辺では旧石器時代遺物が古くから採集されてはいたが、発掘調査によってその存在が確かめられたことは大きな成果である。尖頭器を主体に、搔器、微細剥離痕のある剥片などがあって、大よそ上ノ平遺跡にみられる様相と一致するが、上ノ平遺跡では非黒耀石製の遺物もわずかではあるが存在する。今回の調査では明確な非黒耀石製遺物は確認されなかった（チャートが表採されているが、近代以降に持ち込まれた可能性もあると推測した）。第6図7の石器については、使用石材と製作技法は他の尖頭器と共通するが、石材の形状が細い柱状剥片である。縄文時代の錐形石器として見た場合には、両端部を鋭く尖らせている点に違和感がある。後・晩期にみられる異形石器の可能性も視野に入れながら、温泉寺横遺跡の特徴として報告し、担当者の浅学ゆえ、今後の調査研究に委ねたい。

細石器については第1次調査時には発見されなかつたが、今次調査では表面採集ではあるが確認された。本遺跡に隣接する丘陵上の天神山城跡では細石器石核が2点採集されているが（第9図、島田・中島1995、諏訪市博物館2002）、これらとの関連も想定しておきたい。使用石材はどちらも漆黒耀石である。17は和田フヨーライト群と分析がなされたが、天神山城跡についても肉眼観察で和田岬西側等にみられるものと推測される。また、11・12の石核についても和田岬西側の漆黒耀石で、本遺跡や天神山城跡の細石器に用いられている石と共通することから、細石器製作に伴う遺物と推測される。類似の資料が、和田岬西側の下諏訪町丁子沢西遺跡で出土している（宮坂2000・2002）。調査では尖頭器関連遺物も出土しているが、細石刃石核原形の可能性について示唆がなされている。原産地直下と、やや離れた諏訪湖を望む丘陵端という立地差があるが、漆黒耀石を用いた細石器製作において関連性があるかもしれない。尖頭器の多くは透明度があつて灰色縞がうすく入る諏訪星ヶ台群産の黒耀石を用いているのに対し、細石器は漆黒耀石を用いており、尖頭器と細石器では石の使い分けがあったことが推測される。

温泉寺横遺跡の周辺では谷奥の上ノ平遺跡をはじめ、周囲500m以内に茶臼山・手長丘・北踊場遺跡

などの「諏訪湖東岸遺跡群」と称される旧石器時代遺跡が密集して所在している（第9図、諏訪市 1995）。霧ヶ峰高原一帯の黒曜石原産地から入手した豊富な材料を背景に集中的に石器製作を行ったことは容易に想像されるが、それらの実態は一様ではなく、個々に時代や遺物に違いをみせる。

また、本遺跡については近世高島藩主の葬送儀式を行った場所の推定地でもあるが、関連するような遺構・遺物は発見されず、情報は得られなかった。

<引用・参考文献>

杉原壮介 1973 「長野県上ノ平の尖頭器石器文化」明治大学文学部考古学研究室

諏訪市 1995 『諏訪市史 上巻』

諏訪市教育委員会 1996 「上ノ平Ⅱ・長野県諏訪市上ノ平遺跡第4次調査概要報告書・」

諏訪市教育委員会 2013 「高島藩主廟所・長野県諏訪市高島藩主廟所第1次発掘調査報告書・」

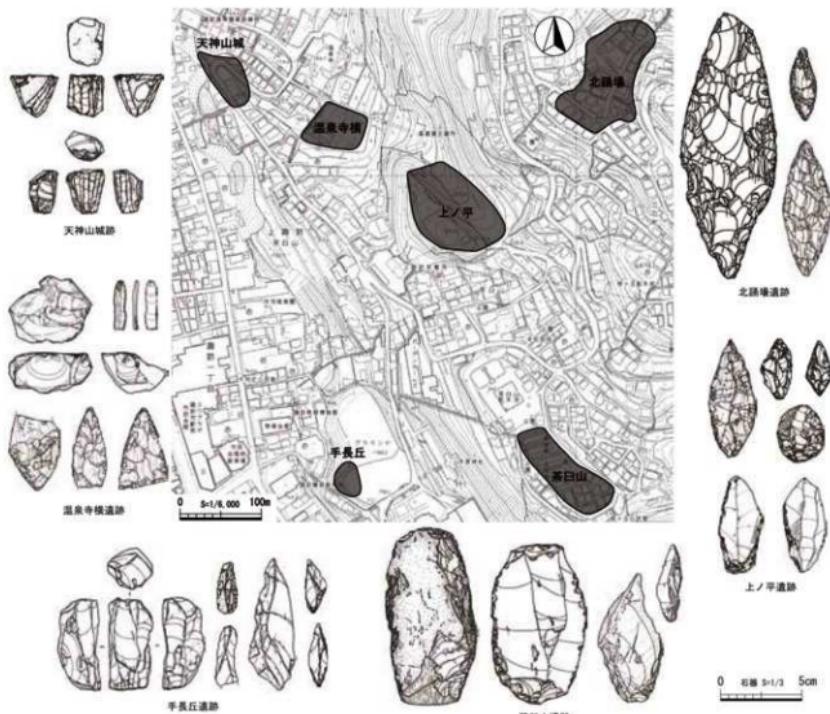
諏訪市教育委員会 2017 「温泉寺横遺跡（第1次）」「市内遺跡発掘調査報告書（平成28年度）」

諏訪市博物館 2002 「茶臼山遺跡発掘50周年記念 諏訪の旧石器展（諏訪市会場）展示図録」

鳥田和高・中島透 1995 「諏訪湖東岸遺跡群採集の細石核」『長野県考古学会誌』76 長野県考古学会

宮坂清 2000 「黒曜石原産地遺跡の調査から」『第12回長野県旧石器文化研究交流会・発表資料・』

宮坂清 2002 「茶臼山遺跡発掘50周年記念 諏訪の旧石器展（下諏訪町会場）展示図録』下諏訪町立諏訪湖博物館



第9図 旧石器時代の諏訪湖東岸遺跡群と出土石器類

III 温泉寺横遺跡出土石器の黒曜石原産地推定

明治大学黒曜石研究センター 池谷信之

1. 分析対象資料

温泉寺横遺跡は霧ヶ峰山頂から諏訪湖に向かって延びる丘陵の先端付近に位置する。眼下には諏訪湖が広がり、JR上諏訪駅付近の沖積地との比高差はわずかに30m~40mである。信州地域の尖頭器石器群の標式的遺跡となっている上ノ平遺跡は、この遺跡の南東側に隣接して広がり、本来は一体の遺跡であったとみられている。

今回の分析対象は、本遺跡から出土した尖頭器およびその製作にかかる剥片等の石器群であり、ナイフ形石器や細石器段階の資料はごく少数である。これらの資料から分析可能なサイズの黒曜石全点を抽出して原産地推定した。

2. 分析方法

a. 原産地推定法

原子核の周囲には内側から順にK殻・L殻・M殻…と呼ばれる軌道（電子殻）があり、外殻側は内殻側に比べより高いエネルギーを有している。原子に照射された一次X線は内殻側の電子をはじき飛ばすが、空席となった場所（空孔）には、外殻側の電子がエネルギーを放出しながら遷移する。このエネルギーが二次X線（蛍光X線）である。軌道間のエネルギー差は原子によって固有であるため、発生した蛍光X線も元素ごとに固有のエネルギー（波長）を有することになる。試料に含まれる元素Aの濃度が高ければ、より多くの蛍光X線aが生じるため（強度として示される）、試料中の元素Aの濃度を求めることが可能となる。

こうした原理を用いた分析法が蛍光X線分析法であり、用いられる機器には「波長分散型」と「エネルギー分散型」がある。後者のエネルギー分散型は波長分散型に比べて分解能が劣るもの、完全な非破壊分析であり、装置がコンパクトかつ比較的安価であり、測定に要する時間が数分と短いという利点がある。今回の分析に用いた装置は、池谷が所有するSIIナノテクノロジー社製エネルギー分散蛍光X線装置SEA-2110である。

測定条件を次に示す。

電圧：50kV 電流：自動設定 照射径：10mm 測定時間：300sec 霧囲気：真空

計測された元素は以下の11元素である。

アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)

得られた元素の強度を用い、以下の2つの方法によって産地を決定する。

①判別図法(図による産地推定

測定の結果得られる各元素の蛍光X線強度から以下の4つの指標を計算する。

指標1 Rb分率 = Rb強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)

指標2 Mn強度 × 100 / Fe強度

指標3 Sr分率 = Sr強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)

指標4 log(Fe強度 / K強度)

指標1・2と指標3・4をそれぞれX軸とY軸とした2つの判別図（図1左・図1右）を作成し、原産地黒曜石の散布域とプロットされた遺跡出土黒曜石の位置によって産地を決定する。

②判別分析（多変量解析による産地推定）

判別図法による産地推定結果を検証するために、多変量解析の一手法である判別分析を行う。判別分析では遺跡出土の試料1点ごとに、各原産地との距離（マハラノビス距離）を計算し、試料との距離がもっとも小さい産地がその試料の産地の第1の候補となる。またそれぞれの産地とのマハラノビス距離から、試料が各原産地に属する確率も計算され、その数値が1（100%）に近いほど推定結果の信頼性は高くなる。表2では紙数の関係から推定候補の第2位までのマハラノビス距離と確率を示した。判別分析と判別図法の結果を総合して最終的な推定産地を決定している。

b. 原産地黒曜石の測定

推定の基準試料となる原産地黒曜石については、以下の産地の原石を収集し測定した。

高原山エリア：桜沢

和田(WD)エリア：芙蓉ライト・丁子御領・鷹山・小深沢・東餅屋・土屋橋北（3地点）・土屋橋東（2地点）・

土屋橋西・土屋橋南・鶯ヶ峰・ウツギ沢・古峠・和田峠西

和田(WO)エリア：ブドウ沢・牧ヶ沢下・牧ヶ沢上・高松沢・本沢下

諏訪エリア：星ヶ台・星ヶ塔・水月靈園・東保・八島

蓼科エリア：麦草峠・麦草峠東・渋ノ湯・冷山・双子池

浅間エリア：大窪沢

箱根エリア：芦ノ湯・畠宿・黒岩橋・甘酒橋・鍛冶屋・上多賀

天城エリア：柏峠

神津島エリア：恩馳島・長浜・沢尻・砂糠崎

c. 試料の前処理と測定

原産地試料については、打ち割って平坦な新鮮面を測定した。石器試料については、注記を避けてなるべく平坦な部分を対象とし、メラミンフォームで汚れを取り除いて測定した。なお判別図で各判別群の外にプロットされたものについては、洗浄をやり直し再度計測した。この作業を3～5回繰り返してもなお判別群外に留まったものについては、「不可」とした。

3. 分析結果

産地推定のための判別図を図1に、分析結果の集計を表1に、各資料1点ごとの分析結果を表2に示した。分析可能であった370点のうち、諏訪星ヶ台産が353点（95.4%）と圧倒的多数を占めた。当然のこととはいえ、その中には尖頭器だけではなく、その未製品やポイントフレクも多く含まれており、この遺跡において諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とした尖頭器製作が、集中的に行われていたことを示している。なお諏訪星ヶ台産と推定された原石（No.290ほか）も含まれているが、これらは本遺跡で出土した尖頭器の製作に十分な大きさではない。したがって本遺跡に持ち込まれたものが原石であったか、ブランクであったかについては、検討の余地が残されている。

尖頭器の未製品の中には和田鷹山産（分析No.5・No.10）が含まれている。さらにポイントフレクにも和田

(WD) エリアの黒曜石があり、本遺跡には諏訪星ヶ台産だけではなく、少数ではあるものの他の原産地黒曜石が持ち込まれ、尖頭器製作が行われていたと考えられる。

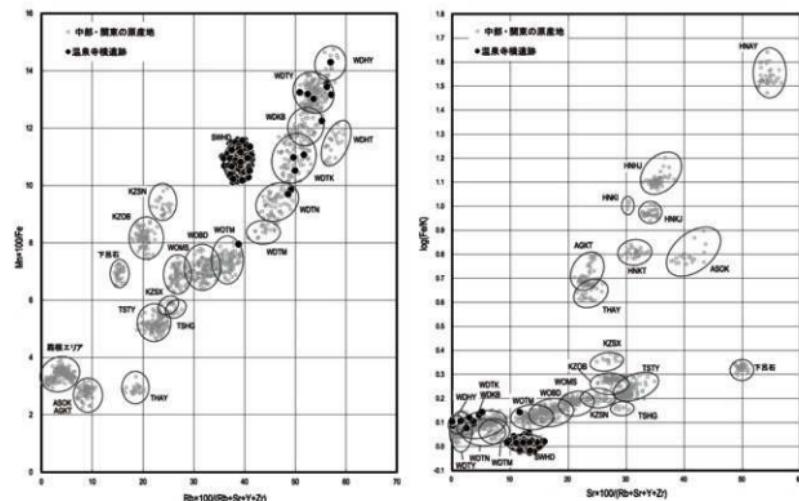


図1 温泉寺遺跡黒曜石原产地判別図

表1 原産地推定集計表

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(?)	フリーリー	WOHY	1	0.2
	唐山	WOTY	8	2.2
	小西沢	WOKB	1	0.2
	土屋郷北	WOTK	3	0.8
	土屋郷西	WOTN	2	0.5
	土屋郷南	WDTM	0	0.0
	吉峰	WOTH	0	0.0
	高松沢	WOTM	1	0.2
和田(?)	ブリック	WODB	1	0.3
	牧沢	WOMS	0	0.0
	星ヶ台	SWHD	363	95.4
蓼科	冷山	TSTY	0	0.0
	豆平山	TSHG	0	0.0
浅間	大曾沢	ASOK	0	0.0
	天城	AGKT	0	0.0
磐梯	磐梯	HNHJ	0	0.0
	御力原	HNKJ	0	0.0
	高砂沢	HNKJ	0	0.0
	上多賀	HNKT	0	0.0
	芦ノ湯	HNAT	0	0.0
神津島	黒船島	KZOB	0	0.0
	妙見崎	KZSN	0	0.0
	妙見崎X	KZSX	0	0.0
高旗山	甘利沢	THAY	0	0.0
	合計		370	100.0
不可		17		
非黒曜石		0		
総計		387		

IV 御屋敷遺跡（第3次）

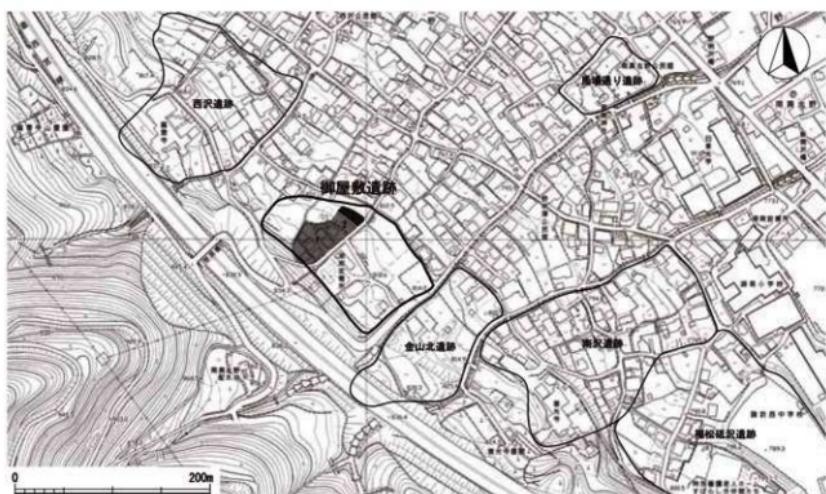
- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市湖南中村澤通 4827-1 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 29年 4月 6日～7日 | 5. 検出遺構 土器集中堆積土（近現代） |
| 3. 調査面積 6 m ² | 6. 出土遺物 土偶・土器・石器（縄文）・陶器（中世） |

7. 遺跡概要及び調査概要

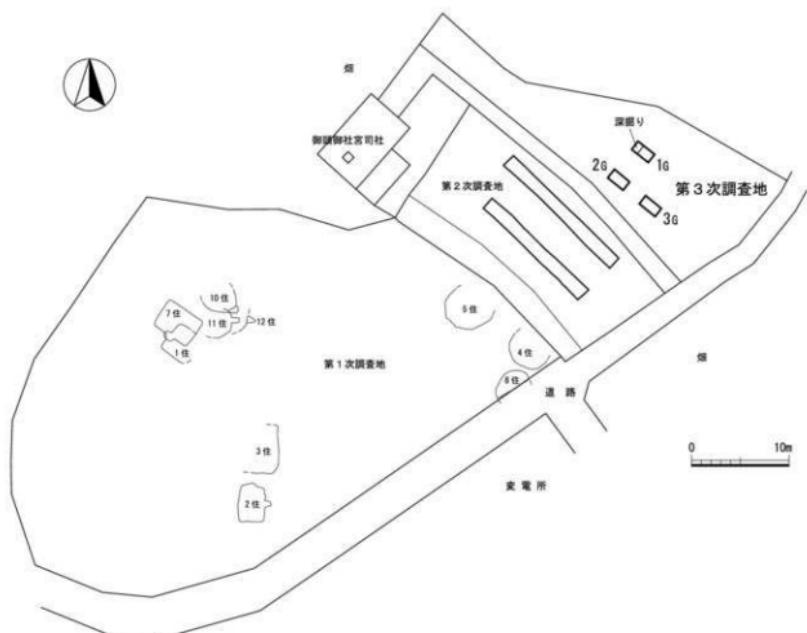
御屋敷遺跡は湖南南真志野地籍、野明沢や西沢など複数の小河川によって形成された扇状地にある（第10図）。背後は中央自動車道が通り、そこを境に急激に傾斜をきつくする山地となる。遺跡は松尾山善光寺と風穴山龍雲寺に挟まれた南北約130m、東西約140mの範囲である。昭和57年に宅地造成に先立って発掘調査が行われ、縄文・弥生・平安時代の堅穴建物跡が検出されている（第11図）。野明沢川を挟んだ南には金山北遺跡、南沢遺跡、福松砥沢遺跡と扇状地の扇頂部を中心に遺跡が続く。

今回は第1次・第2次調査地の東隣接地の畠で、新築の個人住宅建設に伴う遺構等有無確認調査を実施した。南西から北東に緩やかに傾斜する土地で、調査地より東は傾斜がきつくなる。南東から北西の方向に長軸のある長台形の敷地で長さ2m、幅1mの試掘坑を3箇所設定し、人力で掘り下げを行った。

1グリッドは深さ50cm前後で石が平面的に密集して検出され、半裁して下層の堆積を確認した（第12図）。しまりがあつて人頭大の石を含む黒暗褐色土の堆積で、縄文土器片などが散漫に出土した。確認された石の広がりが人工的か明確には判断がつかなかった。2グリッドは1グリッドと近接しているが、堆積土の様相は異なり、自然堆積の黒色土とそれを掘り込むような暗灰色土があり、どちらからもわずかに土器小片が含まれる程度。掘り下げ底面でローム土に変化しつつあった。深さは約90cm。3グリッドでは表土直下から縄文土器片などが集中して出土した。しまりのない黒色土に遺物が多く



第10図 御屋敷遺跡位置図 (S=1/5,000)



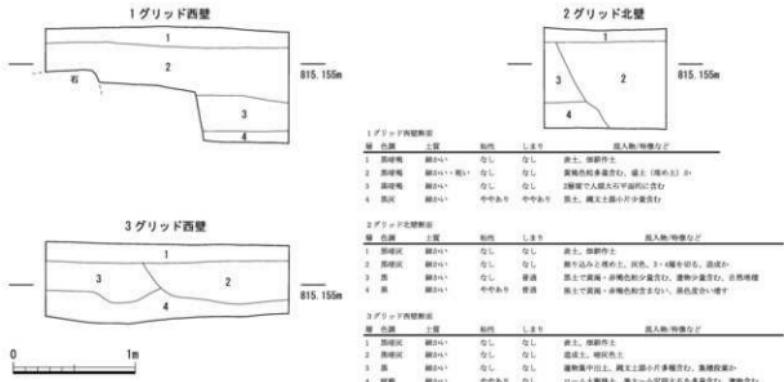
第11図 第3次調査地全体図と過去調査位置図 (S=1/500)

占めるようなあり方であった。廃棄土坑のような性格であろうか、掘り下げた下位から天目塊の破片が出土したことから、縄文時代当時のものでなく、それ以降に集積されたものと判断した。のちの遺物水洗中に土偶や内耳土器片も含まれていたことが分かった。表土直下であること、非常にしまりのない黒色土の様子、遺物の年代が様々であることから古い時期のものではないと考えられる。分布範囲はグリッド外にも広がっているようで、確認できたのは北側に1m程度、深さ約15~40cm。浅く広くみられ明瞭な掘り込みがみられなかったことから、調査時には3グリッド3層として記録した。

出土遺物は3グリッドで集中的に出土したほか、1グリッド・2グリッドでも縄文土器を主体に出土した(第13~14図)。いずれも小片である。縄文土器は中期中葉から後葉が大半を占める。石匙・打製石斧も同時代と推定(写真図版13~39~41)。1は1グリッド出土で縄文時代前期と推定。2以降は中期と推定。8・9は同一個体、山形波状口縁とみられ、隆帯にそって半裁竹管文が施される。12・13も同一個体と推定。30は器形不明だが胎土・焼成は縄文土器にみえる。

35は土偶で、3グリッド3層出土。胴体部分で正面右側を欠損している。脇下の残存状況から両腕はT字状に広がる。下半身に向けて広がりつつある。沈線施文による文様表現がなされる。わずかにふくらみのある乳房と先端の尖る工具で突いた乳頭。乳房の下には所謂ブラ文を施す。ただし、背面や側面からは回らない。乳房の上には逆T字状の線刻、破損面にわずかに正中線がある。背面は丁寧にナデ磨いて黒色であり、意図的に行ったようにみえる。左肩から右下脇腹に斜めに2条の平行沈線を施す。正面の沈線より太く明瞭に施す。左側面の下端破損面にも沈線文がわずかにみえる。

36は土器集中のあった3層内の下位から出土した天目塊。これにより土器集中は縄文時代に遡らない



第12図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

新しい年代のものと判断した。鉄軸掛け黒色釉地に口縁は赤褐色釉。内面は摩耗しているがわずかに滴釉斑文がみえる。37・38は1グリッド出土の内耳土器の口縁部。1グリッドからは他にも破片が出土している。口唇部は面取りして方形のものと、丸くおさめるもの2種がある。石器は1グリッドから石匙、打製石斧2点が出土。黒耀石片の出土は少なく、定形石器はなかった。

遺物は定量出土したが古い時代に遡る明確な遺構が確認されず、近接した3ヶ所で異なる堆積状況を確認したことなどから造成が複数行なわれていると推測した。隣接地の調査内容（諏訪市教育委員会2017）もふまえて検討した結果、工事にあたって記録保存調査を行う必要はないと判断し調査を終了した。

8. 総括

今回の調査地は第2次調査地の東隣りであったが、遺物は比較的多く対照的であった。出土遺物のなかで特に注目されるのは土偶である。出土位置・共伴遺物からは時期を限定できないが、中期中葉の要素をもちらがら背面の斜位平行沈線は後葉から後期に近い様相にもみえる。諏訪市内では西山地域の荒神山遺跡・千鹿頭社遺跡・十二ノノ后遺跡、東山地域で穴場・一時坂・台御堂遺跡で出土している（諏訪市1995）。ほぼ中期に限られており、集落規模の大きい拠点的な遺跡で出土している。御屋敷遺跡では第1次調査で住居跡が複数検出されているが詳細は不明であり、土偶やその他の出土遺物を考えるうえでは第1次調査の内容をみる必要がある。

また、中世遺物が散見されたことは遺跡名称にもある中世の屋敷・居館に関連する可能性があり注視する必要がある。背後の山中には真志野城跡があり、そのほかにも山城・砦の可能性がある尾根もあって、本遺跡は館・屋敷跡であった可能性がある（宮坂2004）。内耳土器や天目碗などはそれらの傍証となりえる遺物である。

<引用・参考文献>

信毎書籍出版センター 1996 「中部高地をとりまく中期の土偶」・同 「シンポジウム発表要旨」

諏訪市 1995 「諏訪市史」上巻

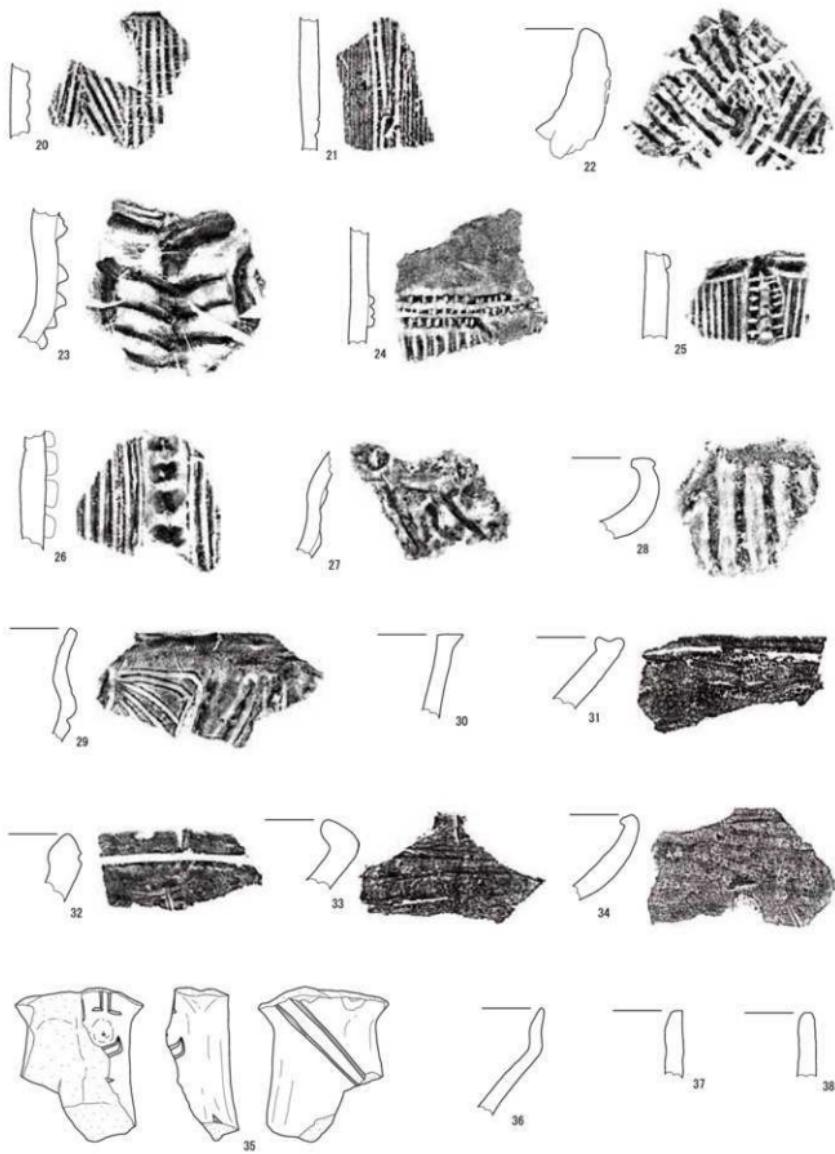
諏訪市教育委員会 2017 「御屋敷遺跡（第2次）」「市内遺跡発掘調査報告書（平成28年度）」

三上徹也 2014 「繩文土偶ガイドブック」新泉社

宮坂武男 2004 「国解 山城探訪 第一集 諏訪資料編」長野日報社



第13図 御屋敷遺跡出土遺物（その1 S=1/2）



第14図 御屋敷遺跡出土遺物（その2 S=1/2）

第2表 御屋敷遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	目録 (cm)	形・調・態	地成	理・色・調	胎・土・粉・墨	出土位置	
13国	縄文	土器	口径 迹跡 高部	内面 線ナデ 外面 圖文	並	小片 内面 暗赤褐色 外面 墓赤褐色	砂粒含む。輝石多い。	IG-15	
13国	縄文	土器	2 中期	内外面 ヨコナデ	並	小片 内面 暗褐色～暗褐色	雲母含む。口唇部に平底竹管状工具による押引文	IG-15	
13国	縄文	土器	3 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒・雲母含む。口唇部に刻み、2条の横引文藉で区画	IG-15	
13国	縄文	土器	4 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 滑跡、向み	砂粒含む。2条の横引文、口唇部に刻み	IG-15	
13国	縄文	土器	5 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒含む。輝石多い。	IG-15	
13国	縄文	土器	6 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒含む	IG-15	
13国	縄文	土器	7 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒多量含む	IG-15	
13国	縄文	土器	8 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 線ナデ	砂粒・雲母含む。突出する口縁が、9と同一個体か	IG-15	
13国	縄文	土器	9 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 線ナデ	砂粒・雲母含む。波状口縁が、8と同一個体か	IG-15	
13国	縄文	土器	10 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 滑跡	砂粒・雲母含む	IG-15	
13国	縄文	土器	11 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒多量含む。波状口縁か、摩耗	IG-15	
13国	縄文	土器	12 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒・雲母含む。器厚薄ひび、ハバに開く波状口縁か、13と同一個体か	IG-15	
13国	縄文	土器	13 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒・雲母含む。波状口縁が、12と同一個体か	IG-15	
13国	縄文	土器	14 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒・雲母含む。半周竹管状工具の押引文	IG-15	
13国	縄文	土器	15 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒含む。摩耗	IG-15	
13国	縄文	土器	16 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 墓赤褐色	砂粒含む	IG-15	
13国	縄文	土器	17 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 黒色 外面 暗赤褐色	砂粒少量含む。波状口縁。ナデ擦く。灰斑等による黒化	IG-15	
13国	縄文	土器	18 小型	内外面 滑跡	良好	小片 内面 空舟 外面 滑跡	砂粒含む	IG-15	
13国	縄文	土器	19 中期	内外面 滑跡	並	小片 内面 墓赤褐色 外面 暗赤褐色	砂粒含む	IG-15	
14国	縄文	土器	20 中期	内外面 滑跡	並	小片 内面 暗赤褐色 外面 墓赤褐色	砂粒含む。壁部上斜位の沈文	IG-15-2G-15	
14国	縄文	土器	21 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒・雲母含む	IG-15	
14国	縄文	土器	22 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色	雲母含む。波状口縁。ソーベル滑擦文	IG-15	
14国	縄文	土器	23 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒・雲母含む。粘土結晶付ける様子状況	IG-15	
14国	縄文	土器	24 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒多く含む。横位に刻み施擦文3条。下位に垂下条	IG-15	
14国	縄文	土器	25 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒含む	IG-15	
14国	縄文	土器	26 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 滑跡、施擦文付	砂粒含む	IG-15	
14国	縄文	土器	27 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒含む。口縁内側に巻き込む。摩耗	IG-15	
14国	縄文	土器	28 小型	内外面 滑跡	並	小片 内外面 滑跡	砂粒多量含む。口縁内側に巻き込む。摩耗	IG-15	
14国	縄文	土器	29 小型	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒含む。沈文文画、施擦起線文	IG-15	
14国	縄文	土器	30 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 滑跡	砂粒含む。表面は取れし外側に突起気泡に突出	IG-15	
14国	縄文	土器	31 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内面 暗赤褐色 外面 滑跡	砂粒含む。口唇部口縁(Y字跡)	IG-15	
14国	縄文	土器	32 中期	内外面 滑跡	並	小片 内面 暗赤褐色	砂粒含む。内側に短く屈曲。横位に1条の沈文	IG-15	
14国	縄文	土器	33 中期	内外面 滑跡	良好	小片 内外面 暗赤褐色	砂粒含む。口縁部内側にY字状に屈曲	IG-15	
14国	縄文	土器	34 中期	内外面 滑跡	並	小片 内外面 滑跡	砂粒・雲母含む。口縁は内側に短く屈曲し取れし。外側は丁寧に仕込みがく	IG-15	
14国	縄文	土器	35 中期	土偶	良好	表裏面 線刻、ナデ擦き	砂粒・雲母含む。表面は丁寧にナデして磨く。意識的に黒化処理で削り下げる。乳房・三角形を表現したり。乳頭の上下に細かい縫隙がある。背面は背筋部に平行な擦痕	IG-15	
14国	縄文	陶器	36 中期	天日焼	良好	小片 内面 黒色	黒色斑地で口縁は赤褐色。内面わざわざ裏文	IG-15	
14国	縄文	陶器	37 中期	内耳土器	良好	小片 内面 黑色	砂粒含む。口唇部は面取りで平ら。断面方角	IG-15	
14国	縄文	石器	38-39	長さ 幅 厚さ 6.1 5.1 0.7	刮削	良好	小片 内面 黑色	砂粒・雲母含む。口縁部はつぶさんでわずかに面取り	IG-15
14国	縄文	石器	40-41	打製石斧	良好	小片 内面 黑色	片刃、重量2kg	IG-15	
14国	縄文	石器	42-43	打製石斧	良好	小片 内面 黑色	安山岩、板状擦痕、左右非対称、134g	IG-15	

V 千鹿頭社遺跡（第13次）

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市豊田久保田 3782-1 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成29年4月24日～25日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 6m ² | 6. 出土遺物 土器・石器（縄文）・須恵器（平安） |

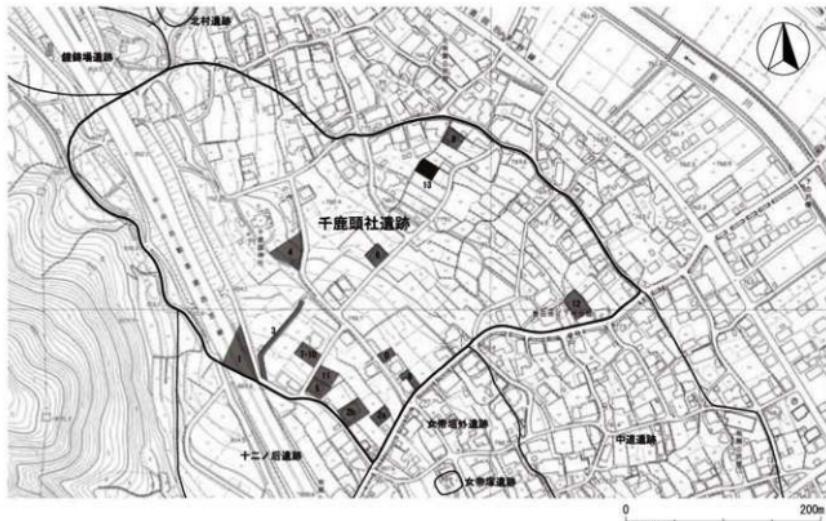
7. 遺跡概要及び調査概要

千鹿頭社遺跡は諏訪湖西側の緩斜面に立地する集落遺跡で、有賀峠直下に広がる中沢川の扇状地上にある（第15図）。有賀峠は諏訪盆地と伊那谷を結ぶ交通の要所として知られる。南西に接する十二ノ后遺跡とは一体的な遺跡とみられ、縄文時代から平安時代に至るまで大規模な集落が形成されている。また、北西には鐘録場遺跡があつてこちらとも検出されている遺構の存続年代に重なるところがある。

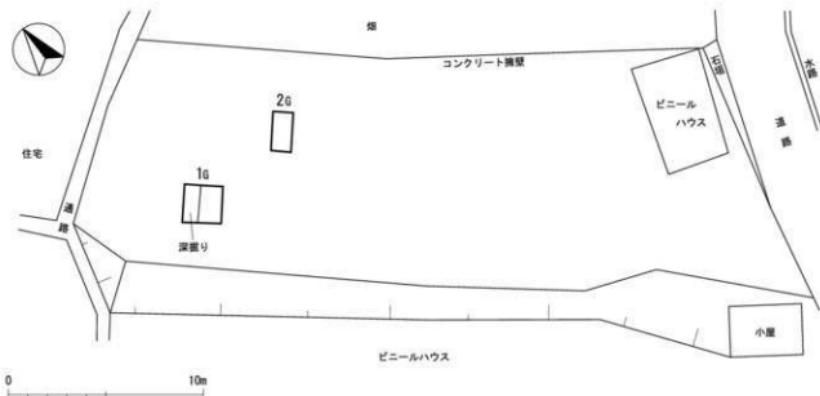
過去に12度13地点において調査が実施され、昭和49から50年の中央自動車道建設工事に伴う発掘調査では縄文時代と平安時代の竪穴建物跡を多数検出している（日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 1975）。遺構が濃密に分布するのは高速道路部分を含む標高800mから810m前後の緩斜面である。

今回の調査地は遺跡北東、扇状地下方の斜面地で標高は約775mである。調査時点においては畑として利用されており、周辺も畑やビニールハウスが目立つが、過去には水田も多かったという。調査地も堆積土の観察から水田であった可能性がある。敷地の北西半、住宅建設範囲内に2m×2mと1m×2mの試掘グリッドを設定して人力で掘り下げを行った（第16図）。

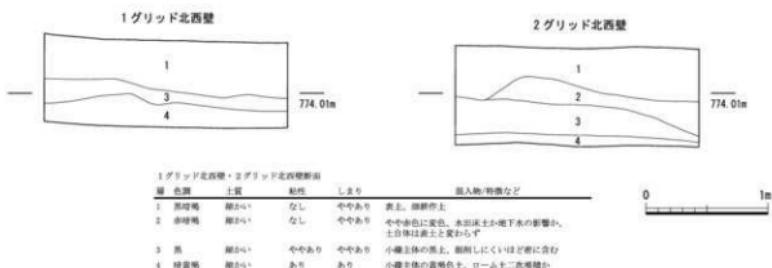
2ヶ所のグリッドとも確認された堆積土は共通していた（第17図）。やや厚い表土・耕作土があり、



第15図 千鹿頭社遺跡位置図 (S=1/5,000)



第16図 調査地全体図 (S=1/250)



第17図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

2グリッド2層は赤褐色に変色したような色調の違いがあり、水田の床土か地下水による影響と推測した。3層は小さい礫が多量に含んでしまっている。黒色で遺物が数点出土。4層は暗黄褐色に色調が変化するが、礫の含み方は3層と同様である。掘り下げの底面以下にも続くとみられ、遺物は出土していない。4層の基盤はローム土であるが、多量に含まれる石の様子から二次堆積によるものと推測される。

出土遺物はごくわずかである（第18図、写真図版13）。掲載した遺物は全て1グリッドからの出土。1は縄文土器、中期初頭か。2は須恵器の壺蓋の口縁片、8世紀後半から9世紀代にみられる器形。3は砥石で、角柱状で2面に研磨による摩耗がみられる。時代は不明、平安時代以降であろうか。黒耀石製で小型の石鎌が出土している（写真図版13-4）。完形で長さ1.5cm、幅1.25cm、厚さ0.2cm、重さ0.3g。このほか、黒耀石片13点、近世末から現代にかけての陶器・磁器の小片17点が出土した。

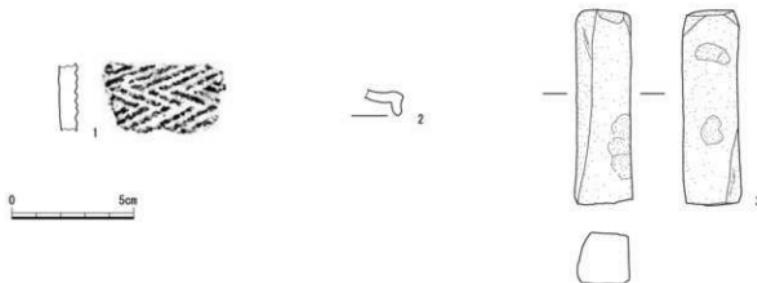
堆積土の様子と出土遺物の量・内容から、当該地に遺構分布があったとは考えにくい状況であった。よって、住宅建設工事においては改めて発掘調査を行う必要はないとの判断し、終了した。

8. 総括

緩斜面で好立地ではあるが、遺物の出土はわずかで、周囲（斜面上方）からの流れ込みと推測されるようなあり方であった。千鹿頭社遺跡の包蔵地範囲は広いが、遺構などの検出は西側の山麓下端の緩傾斜地に集中し、東に下るにしたがって遺物がわずかに出土する程度になる。流れ込みによる遺物の二次的な分布範囲については、包蔵地範囲の再検討も必要であろう。

<引用・参考文献>

日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査 報告書・諏訪市、その3・昭和49年度」



第18図 千鹿頭社遺跡出土遺物 (S=1/2)

第3表 千鹿頭社遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	法量 (cm)	形・調・整	成	質・色・調	胎・土・特・徴	出土位置
1804 1	縄文 中期 中期	土器 口徑底径器高 — — —	外面 山形平行線文	不良	小片 内外面 暗褐色	織密、砂粒多量含む、摩耗、もろい	IG1層	
1809 2	奈 良・ 平安 後醍醐 御	— — —	内外面 ロクロ成形	良好	口縁部小片 内外面 濃灰色 内面 淡褐色	織密、端部折り曲げて垂下、内面に降灰釉かかることから裏返しで焼成	IG1層	
1810 3	平安 以降	石器 石	長さ 幅 7.9 2.4 厚さ 2.1	研磨による摩耗	—	4/5 内外面 濃白色	安山岩、角柱棒状、2面研磨、一部に削り無形版(製作工具跡)。重量72g	IG1層
1814 4	縄文	石器	長さ 幅 1.5 1.25 厚さ 0.2	研磨	—	透明 半透明、淡灰色	黒耀石、小形、重量0.3g	IG1層

VI 境日向遺跡（第6次）

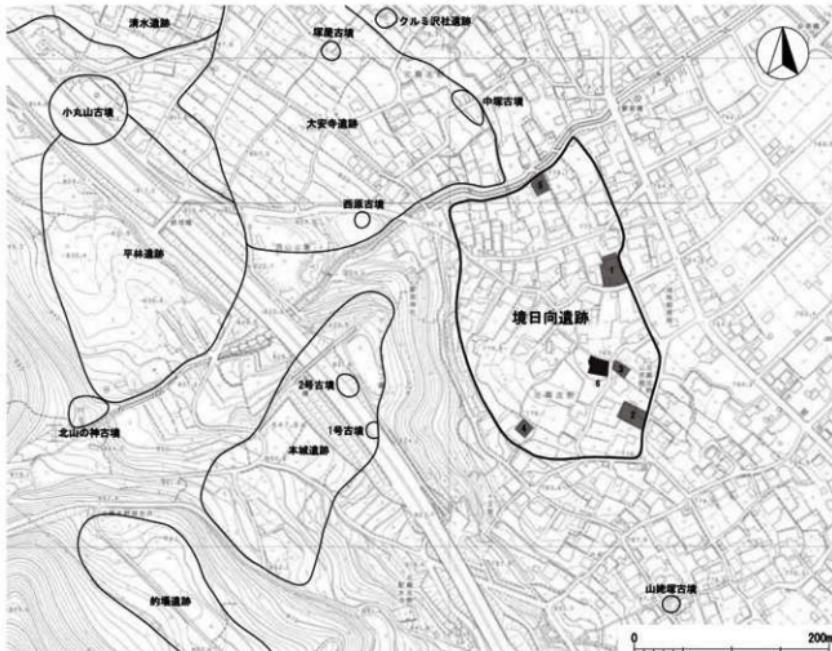
- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市湖南中屋 6162-1 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 29年 7月 11日～12日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 6 m ² | 6. 出土遺物 須恵器（古墳） |

7. 遺跡概要及び調査概要

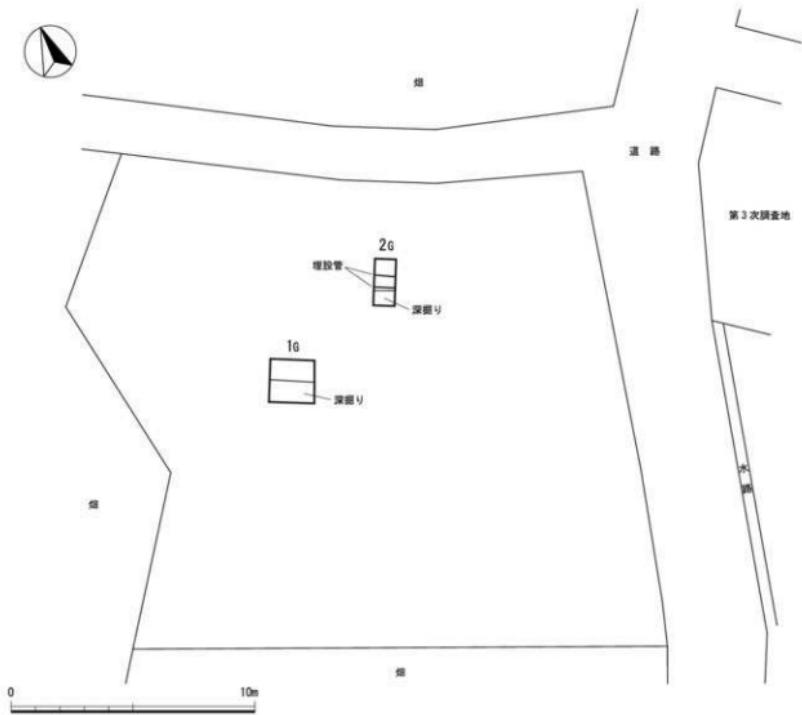
境日向遺跡は諏訪市湖南の北真志野に展開する遺跡で、守屋山系の山裾から平坦部にかけて立地している（第19図）。遺跡西側の舌状に張り出した尾根上には縄文時代から古代にかけての集落遺跡である本城遺跡が立地し（日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 1975）、遺跡北側を流れる中ノ沢川対岸の緩斜面には大安寺遺跡が展開している。

本遺跡では過去に5度の調査が実施され、縄文時代から中世までの各時代の遺物は出土しているが遺構の検出はなく、堆積土の状態などから本遺跡の中でも平坦部については集落の展開する可能性は低いとみられている。

今回、遺跡南東の傾斜の緩い谷の末端に位置する畑地において個人住宅建設の計画があり、事前に試掘・確認調査を実施した。当該地は中ノ沢川から供給される土砂堆積の範囲からはやや外れ、西側の山



第19図 境日向遺跡位置図 (S=1/5,000)

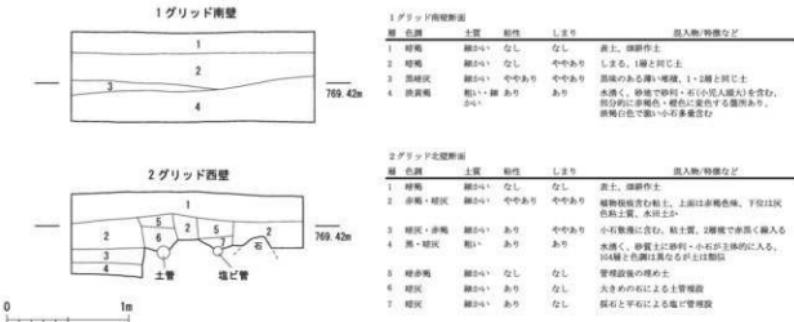


第20図 調査地全体図 (S=1/200)

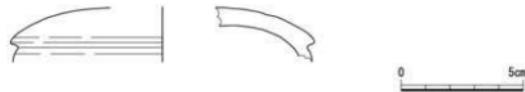
麓端の急峻な崖状斜面から土砂供給されると思われる。中ノ沢川沿いには住宅が密集しているが、調査地周辺は局所的に畠が広がっている。調査地東側の道路を挟んだ向かいは第3次調査地で遺構等の検出はされていない（諫訪市教育委員会 2004）。

住宅建設範囲内に $2m \times 2m$ の試掘グリッドを1箇所、 $1m \times 2m$ のグリッドを1箇所設け（第20図）、手掘りにより掘り下げを行った。その結果、畠の表土は10～20cm、その下は多量の小礫が黄褐色土に含まれる堆積で、湧水がある（第21図）。2グリッドでは表土下40cmに土管と塩化ビニール管が東西方向に並行して埋設されていた。近現代に敷設された農業用の設備だろうか。両者の埋設には時間差があるとみられ、土管の方が古いだろう。1グリッドでも東壁際に土管が出て、端部は平石で蓋をしていた。両グリッドとも黒色から暗濃灰色の耕作土下には水のしみだしてくる礫層がある。耕作土中からはわずかに遺物が出土するが、礫層からは出土しないこと、礫層は固くしまっていて人為的なものではないと考えられ、洪水などの短時間での土砂供給・堆積によるものと判断した。

出土遺物は黒耀石の小破片と須恵器片、近現代の陶器片があった。耕作土（1層）と暗褐色土（2層）からの出土である。非常に散漫で、遺構等が分布する様相ではなかった。須恵器片は古墳時代（6世紀前半か）の蓋坏の蓋で、つまみが付くかは不明（第22図）。口径は復元値で約12.5cm。灰色地に濃緑褐色の降灰釉がかかる。摩耗しており、他所から流れてきたような印象を受ける状態である。



第21図 調査グリッド断面図 (S=1/40)



第22図 境日向遺跡出土須恵器 (S=1/2)

以上の内容から建設工事範囲内については遺構等の分布はなく、工事実施にあたっては本調査の必要ないと判断した。所定の作業を行ったのち、埋め戻しを行い終了とした。

8. 総括

調査地は現在においては緩斜面地で日当たりも良く良好な土地であるが、標高が低いことから過去においては利用が難しい土地だったのかもしれない。現況は畑であるが小さな石が多くあり、その供給源は西側の山麓からである。中央自動車道の通る丘陵端からは約 50m の比高差があり、崩落・流入していくものと思われる。また、耕作土下では比較的浅い深度で湧水もあり、遺構分布の可能性は低い。

古墳時代の須恵器について第5次調査でも6世紀前半と推定される蓋坏の身が出土している(諏訪市教育委員会 2011)。やや摩耗しており、中ノ沢川沿いの氾濫堆積土と推測される土層から出土した。丘陵上先端では古墳時代中期(5世紀後半から末頃)の古墳2基(本城1号・2号古墳)が検出されているが、今回出土した須恵器などからは、遺跡より西側の土地にはさらに別の古墳が眠っている可能性もうかがわれる。周辺での調査機会を得た際には注視していただきたい。

<参考文献>

- 日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 諏訪市 - その3 - 昭和49年度」
- 諏訪市教育委員会 2004 「境日向遺跡試掘調査(第3次)」「市内遺跡試掘調査報告書(平成15年度)」
- 諏訪市教育委員会 2011 「境日向遺跡(第5次)」「市内遺跡発掘調査報告書(平成22年度)」

写 真 図 版

写真図版 1



温泉寺横遺跡遠景（東から、昭和37年頃、藤森栄一撮影）



平屋建物解体前の様子（東から、平成28年夏撮影）



現在の様子（東から、第2次調査中）



調査地全景（南から）



調査地と周辺の遺跡（西から）



1 トレンチ完掘（南から）



1 トレンチ西壁（北東から）



1 トレンチ北壁（南から）



1 トレンチ北側 東壁（西から）



2 トレンチ西壁（南東から）



2 トレンチ東壁（南西から）



2 トレンチ北側 石器集中出土範囲（南東から）



2 トレンチ北側 石器集中出土範囲（南西から）



2 トレンチ北西隅 サブトレンチ（東から）



2 トレンチ北西隅 遺物出土状況（第6図7）



2 トレンチ北西隅 堆積土（南から）



3 トレンチ西壁（南東から）



3 トレンチ東壁（南西から）



3 トレンチ完掘（北から）



3 トレンチ北端 西壁（東から）



4 トレンチ完掘（西から）



4 トレンチ完掘（東から）



4 トレンチ南東壁（西から）



4 トレンチ北西壁（東から）



解体前の平屋住宅（西から）



重機による表土掘削の様子（3 トレンチ、南から）



作業員による精査作業の様子（3 トレンチ、北から）



埋め戻し終了後の遺跡全景（南西から）

1



御屋敷遺跡遠景（西から、第1次調査時撮影、矢印の交点が第3次調査地）



調査地全景（北西から）



1グリッド完掘（北東から）



1グリッド完掘（南東から）



2 グリッド完掘（北東から）



2 グリッド完掘（南西から）



2 グリッド北壁（南東から）



3 グリッド完掘（北東から）



3 グリッド完掘（南東から）



3 グリッド完掘（北西から）



遺物集中出土範囲（北から）



調査の様子（南から）



千鹿頭社遺跡と有賀岬 遠景（東から）



調査地全景（西から）



1グリッド完掘（南東から）



1グリッド完掘（南西から）



1グリッド北西壁（南東から）



2グリッド完掘（南東から）



2グリッド完掘（北東から）



2グリッド北西壁（南東から）



境日向遺跡全景（東から、奥は中央自動車道）



調査地全景（南東から、奥は蓼宮社）



1 グリッド完掘（北から）



1 グリッド完掘（東から）



1 グリッド南壁（北から）



2 グリッド完掘（東から）



2 グリッド完掘（北から）



2 グリッド西壁（東から）



温泉寺横遺跡出土石器



御屋敷遺跡出土遺物（その 1）



背面の施文と表面調査

御屋敷遺跡出土遺物（その2）

写真図版 1 3



御屋敷遺跡出土遺物（その3）



千鹿頭社遺跡出土遺物



境日向遺跡出土須恵器

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちょうさほうこうくしょへいせいにじゅうきゅうねんど							
書名	市内遺跡発掘調査報告書（平成29年度）							
副書名	長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	諏訪市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第78集							
編著者名	児玉 利一 池谷 信之							
編集機関	諏訪市教育委員会							
所在地	〒392-8511 長野県諏訪市高島1-22-30 電話0266-52-4141							
発行年月日	平成30（2018）年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	
新んせんじよこいせき 温泉寺横道跡	諏訪市上諏訪笠松 10690-1	202061	15	36° 02' 57"	138° 07' 08"	20170227 ~ 20170306	48	駐車場建設に係る試掘・確認調査
おやしきいせき 御屋敷遺跡	諏訪市湖南中村津通 4827-1	202061	327A	36° 00' 30"	138° 05' 41"	20170406 ~ 20170407	6	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
ちかとうしゃいせき 千鹿頭社遺跡	諏訪市豊田久保田 3782-1	202061	305	36° 01' 23"	138° 04' 59"	20170424 ~ 20170425	6	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
さかいひなないせき 塙日向遺跡	諏訪市湖南中鹿 6162-1	202061	332	36° 00' 52"	138° 05' 28"	20170711 ~ 20170712	6	個人住宅建設に係る試掘・確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
温泉寺横道跡 (第2次)	生産	旧石器	石器集中出土地点 1箇所	石器	尖頭器製作遺構を検出			
御屋敷遺跡 (第3次)	集落	縄文・中世	土器集中出土堆積 1箇所	土偶・縄文土器・陶器	土偶が出土			
千鹿頭社遺跡 (第13次)	集落	縄文・奈良・中世		土器・石器・須恵器				
塙日向遺跡 (第6次)	散布地	縄文・弥生		須恵器				
要約	・温泉寺横道跡 第2次：旧石器時代の尖頭器製作に関わる石器集中出土地点を検出。黒曜石製の尖頭器などが出土。 細石刃石器も表揚された。 ・御屋敷遺跡 第3次：土偶の胴体破片が縄文土器片などとともに出土。諏訪市内での土偶出土は僅かであり、貴重。 ・千鹿頭社遺跡 第13次：遺構なし。遺物少量出土。 ・塙日向遺跡 第6次：遺構なし。遺物少量出土。							

市内遺跡発掘調査報告書（平成29年度）

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

平成30（2018）年3月30日

編集・発行 諏訪市教育委員会

長野県諏訪市高島1-22-30

印 刷 有限会社増澤印刷所